

隨想

★韓国とび歩き

コスモスの花 田靡 新

（作家）

九月二十四日、大阪空港からコリア四日間の旅。快晴。ところがブサンは雨。ブサンから慶州へ。雨しぶきの高速道をひと走り。

翌日も梅雨をおもわせる冷たい雨。キヨンジュ東急ホテルの窓からうらめしそうに溜息をつく。眼

韓国にて 著者



カット／中西 勝

の前は広い人工の池があつて霧も深い。岸の柳並木が風にふくらむ。

このコスモスの道は、翌日のソウルへの道にも、さらにその北三

れぞれに食卓を囲む。なごやかそなうなスタートだが、外交官を自負する彼女たちは何とかホテルインの約束を取付けたいらしい。そんな気でない私など断るのに難儀してしまう。商談は決裂。

二五日は慶州めぐり。新羅時代

の仏国寺、掛陵、新羅焼窯場。午後は王陵の古墳跡から博物館とカジノ。私の心は村や町の風景に捉われていく。眺めるもの、ふりかえるもの、すべて初めてなのに、いつか見た、歩いた風景と重なつて、いよいよ窓から顔が離せない。ネバールの農村にも似ている。チベットやシルクロードの果てに通じる何かがあつて（掛陵の石像な

ど）やはりここは大陸・朝鮮半島なのだと納得させる。

幹線道路の両側は、いまを盛りのコスモスの花ざかり。可憐で根強い花の群れが、行けども行けどもバス道に連なっている。雨にぬれ風にそよいでも、ささやくばかりのりりしさ。紅のサルビア、黄色いポンポンダリアも。コスモスの花は川原や山のふもとにも咲き乱れ、種を空からでもまくのだろうかとガイドに訊いてみると、ちゃんと植えているという。なるほど川岸の群れは畝のようにもみられる。

このコスモスの道は、ソウルへの道にも、さらにその北三〇数キロの板門店の道路にまでづき、この旅いちばんの収穫だった。花を愛する人々がそこに住み、花のいのちとともに暮らす心の豊かさを見る思いがしてくる。コスモスの道をひたすらバスは走りづける。

農村は新しい村づくりがすすんでいて、古い藁屋根は影をひそめ、新しい色瓦屋根の両翼がちよつと空にそつて（オキナワ風の家屋にも似ている）モダンなレンガ造りの二階建てや、またその上に上屋を建てたり、走り去る風景は清すがしい。

小川ではおかみたちの砧で打つ洗濯風景、頭の上に大きな籠をの

せ、泳ぐような足どりの女たち：私が探し求めていた心象風景は残っていた。

ソウルは八百万人の大都市で、いま市街地は南へ北へと広がり、中心部はあちこちで地下鉄工事中の坂のある街並みは、おもむきもあるが都市のもつ混沌は大阪も神戸も同じ。東大門近くの市場、裏街を歩く。路上市場はパンコック、ホンコンに通じ働きもののおかみたちが主だ。

二七日は板門店へ。北へ通じる鉄道も道路も切斷され、コスマスの花もさびしそう。平和のまま南北の交流を願わざにはおれない気持になる。高麗青磁の利川、李朝白磁の広州へは、また次の機会にあわただしい旅に別れを惜しみつつ。アンニヨン テーダニカムサハムニダ。

秋の 北京情緒 木村 憲吾

（娘の壇）

九月中旬から十月中旬までのわ

ずかな間が「燕京の秋」といわれ、抜けるような青い高い空、澄みきつた空気。この頃、鴨子に脂がのつて、ネギがシュンになる。人も食慾の秋、正に天下の美味、北京ダック「日々是好日」新栗、リン



故宮にて 筆者

ゴ、梨、白菜が街に出廻り、永い冬に入る前の最高の季節だ。

郊外から市内に向って並木に包まれた幾本もの道路が直線に走って杜の都北京の手足になり厚みを成している。道路沿いに新しいビルが着実に構築されつつある。

街中、自転車の洪水で三百万台というすごい量の自転車王国の街。ガソリン臭の無い珍しい大都市北京は空気が綺麗。赤と黄の建

造物が冴えて美しい。故宮、明の十三陵、頤明園、万里の長城など名所旧跡は保存が実に行届いて完璧だ。紫禁城造築の時、瓦を焼いた跡が琉璃廠の名称で骨董街として知られた一劃だが、ただ今取壊しの最中で、二〇〇軒古い老舗が競いあつた往時の盛況がどう再現されるのか期待されているところの一つだ。

夜明け前、ねぼけ眼で前門外天橋市場をきよろきよ歩き廻つて英國製銀台の立派な望遠鏡を掘り出したのもやはり秋だった。非常に好くみえ、味をしめて再三通つたが、其後目覚しいものに出会う

ことはなかつた。アセチリン瓦斯のニホイも光も今は無い。四〇年前のコマを思い出しながら天壇に向う。天壇公園の松柏の樹々も四〇年前と変わらない。これらの樹今は六百年位経っているとか。たかだか四〇年の歳月では大した差がないらしい。悠々たる歴史の流れを感じる。定陵の地下三〇メートルにある、祭壇に飾られた明代初期の一対の大壺が窓から出たままの初の見事さに驚き、撮影禁止のため、残念ながら我が記憶に留めるのみ。とにかく未だお目にかかることがのない完品だつた。

出来れば、北京に二三ヶ月滞在し、自転車でゆっくり見物するのが理想。そして大衆食堂の騒音の中で食事をしたらおしまいにする店は府井の菓子店で喰べた点心の旨さとフランキのよかつたこと。豚一匹料理したらおしまいにする店は樂しかつた。時間に依つて、足、鼻、耳、内臓と何が出るか面白い食べ物屋だつた。その御店も誰に尋ねても知る人は居ない。前門外の雜踏の中にある茶館に初めて北京へ旅した時、「メニユ」を径に上から注文した。ところが出てはスープ、スープ、又スープで中華料理の注文は横にすることをその時知つた。

北京市内至るところ防空壕が設営され、一部は観光用にしているが、私には無用と遂に行かず、もっぱらほつつき歩き専門。毎日ホテルへ帰ることが惜しくて遂々退れてばかり。夜更けて胡同の家々からもれる淡い光に影を引く物売の声、胡弓の音。北京のしみじみとした情緒はそこんとこにあるんです。

Don't smokeに

おつたまげ

中西 勝

（画家・二紀会兵庫県支部長）

シンガポール日本友好協会から招きを受け、六甲ライオンズクラブや神戸輸入促進フォーラムの協力を得て、神戸二紀が九月五日して十日までシンガポール「第十一回日本文化節」に参加という突然降つてわいたような話。

シンガポールに行くといふと、会う人ごとに「あそこはきれいですよ」と聞かされたが、私はきれいな所が嫌いなため、旅行として

ジャカルタのスラバヤ通りにて中西夫妻



の興味は全く感じていなかつた。

ところがチャンギー空港に着く

なり、その規模の大きさにびっくり。ホテルで一夜明かした後、窓の外を眺め、想像していた美しさと

全く違う美しさに感嘆した。まさ

に公園都市国家。ゆとりのある緑

したたる中に機能美だけでなく、

芸術性、民族性のあるフォルムが

感じられる建築物があり、ほと

とか生きながらえている感じでな

く、激刺としてふくよかで咲き誇

つているという印象を受けた。

旅先の印象を言葉で他人に伝達

する難しさをつくづく感じた。

一番驚いたのは、ホテルから出

て女房が先に乗ったタクシーにく

わえたはここで乗りこもうとしたと

たん、「Don't smoke」とばかり

つかい声。あわやたばこを落っこ

としそうになつて、いつたいだれ

だと思い、まわりを見回すとタク

シーの運ちゃんの恐い顔。あわて

て、ホテルへ灰皿を探しに逆戻り。

あんな大きな声で怒鳴られたの

は、戦後初めてのことだった。

それほど市中では、タバコのポイ捨てに厳しく、罰金もとられるほどのに、いったんアラブ街やインド人街などのそりやもうきたない所へ行くと、たばこの捨て場は溝の中で皆いっせいに「ほれ、ほれ」とけしかける。こつちはま

た怒鳴られるんじやないかと警戒しながらほつたら、田舎者やなどいう感じでニヤニヤしている。

近代化を進めようとするシンガ

ポールの姿勢の陰で取り残された地域が、ほんの目と鼻の先で進行しているといつた感じだ。

絵を描く者として街でおもしろいと思ったのは、舗道につき出

た家の屋根。その道のまん中に見えるサルターンモスク教会の丸い屋根がピカッと光つてゐるのは素晴らしく、創作意欲をそそられた。

壁は全体に淡いバステル調。いぼいぼのあるくだもの、ゴボゴボと

した樹、まさに最高の条件で育つたという感じだ。道端で写生して

いても、低開発国の場合人がいっぱい集まつてきて大よそ描けたもんじやないんだが、そういう無作法な面は全くなかつた。ある意味

での常識、教養を持つてゐるみた

いだつた。

こちらは神戸サイドで出かけたのだが、シンガポールでは国家サイドでの応対を受け、心から歓迎してもらい、時には恥しさを感じたほどだった。が、日本人の目

指す海外の幅の広さは向こうにも感銘を与えたのではないだろうか

これを機に、今後も気楽な交流を願い、相互の展覧会出品の機会を

秋のノクターン

吉村 由美

(随筆家)

(六甲ジャニヤス・カレッジ代表者)

風のささやく白い坂道の街に、
冷たさを加えた秋のさやめきが流れ
て流れる。深まる季節は道ゆく人々
によりそいながら、静かに、

さかりの光彩を浮きたせはじめ
るの。白い石畳の並木路が続き、
すかに響く靴音も、行き交う人
影のはほえむ目差しも、心暖かな
思いの中を通りすぎる。街路樹の
葉は、黄金色の旋律の中に舞い散
り、やがて去ろうとするひと時の
華やぎを告げているのだが。

北野坂の並木をさやめかせる秋
の光り、寂とした風のかせさ。
ピエール・ボルトのピアノが奏で
る「ノクターン」が私の思惟の中
を流れゆく。『音の画家』によ
ばれるボルトの音楽は、ドラマ性
よりもむしろ映像的な表現力を感



自然の風景
を、音楽的

にいざなう
世界の扉と

じさせるのだ。ロマン・ボランスキー監督の映画「テス」のテーマ音楽「哀しみのテス」も、あの霧におおわれたかのよう、静寂にみちた画面の美しさを、美術監督のピエール・ガフロイとジャック・ステイブンスのすぐれた映像感覚とともに、ボルトの音楽は、画面構成をきわだたせる表現効果を持つていた。

リチャード・クレイダーマンのナイーヴな優美さ、カナダ出身のフランク・ミルズの都会的でやかな明るさ。そしてピエール・ボルトの音色には、風景の中にさやめき揺れる光りの透明感がある。それは自然が持つ、しなやかな生

命力の美しい部分を、音楽家としての彼の感覚が心暖くとらえてい
るからであろう。街角にたたずむ季節に、バランス郊外の林の道に、落葉の散るかせさに、深まる空のはるかなる青さに、作曲家としての心に沸きおこる、楽想の契機が秘められているように思われる。彼の音

楽は、その根源的な部分で、楽想

からあの旋律は奏でられはじめるのだ。ピエール・ボルトの「ノクターン」そして「黄金の風」に、秋のさかりの華やぎと、寂々とした思いと、またさらにざわめく移行の時の、ダイナミックな自然の表象を感じる。時には海辺の波のさらめきを、またはるかに続く林の黄金色の樹々に映じる光彩を、そしてオーロラの多様な色調に変化する神秘的な光りによって、きわめて絵画的な音楽の映像を描き出すのだ。

北野町の街は、たとえばユトリロの「白の時代」に描かれたモンマルトル風景や、教会の油彩画のような雰囲気を持つ一郭がある。しかしユトリロの絵の詩情と、深く沈んだ哀愁に最も近い風景をこの街が見せるのは、むしろ冬の暗色の季節なのだ。

秋のさやめく光彩にゆれる樹々の葉。異人館のよろい戸は開かれ、人々のさんざめきや、つたのからまる洋館の壁と散歩の小径にも、今年の秋の想いには、ピエール・ボルトのピアノが奏でる「ノクターン」の旋律が、ふさわしいのではないかと思つてみたりしている。

文芸誌「現」編集室
受験予備校

六甲ジャニヤス・カレッジ本部
(078) 821-4666

神戸女学院高等部

下田 閑子

（神戸女学院中高部教諭）

こよひなりわたら 鐘のひびきは
み子の生れたもうさちをつたうる
ともにつどう我らも声をあわせて
み子をほめたたえん

かねに合わせて

讃美歌 第二篇 一二一

西宮市岡田山にある神戸女学院

では、この数年来、同校の父兄、
近隣の方々を招いて午後六時三十
分よりパイプオルガンのある講堂
でクリスマス礼拝を守っている。
一九七九年からはオルガンの前
奏につづきオーピングのハンド
ベルの演奏をする事になった。メ
ロディーは冒頭に書いたドイツの
クリスマスカロルである。会衆の
気分がおさまると音楽学部による
オラトリオの演奏がある。その後



選択授業でハンドベルを学ぶ高3の生徒達

もう一度、ハンドベルの次の曲が
なり響くが、この所がこの夜の最
高潮の時であろう。会衆はその美
しさに興奮しているようだ。

私が初めてハンドベル演奏をき
いたのは十四年前、京都同志社女

子高校主催のクリスマス礼拝を訪
れた時であった。「栄光館」の二
階で白いガウンを着た七名の乙女
達の打つベルの響きは今も忘れる
事の出来ない感動的なものであつ
た。それから十年後、はからずも
日本ハンドベル連盟主催する夏期
講習会に参加する事が出来、その
年の秋にはハンドベルのオオクタ
ーヴを備え、まず最初の試みとし
て高三音楽選択の授業にとり入
れ、現在に至っている。

さて、普通ハンドベルと呼んで
いるものは、正しくは、イングリ
ッシュ・ハンドベルの事である。
鐘の部分は銅と錫の合金で铸造さ
れ、その割合は80%対20%で、それ
が、最も美しい音色を出すといわ
れている。鐘を鳴らす「振子」は
一方にだけ往復するようになつて
いて、振る度びに一度だけ鳴るよ
うにスプリングで調節してある。

ハンドベルは十六世紀にイギリ
ー

スの教会で生まれ、後タワーベル
の練習用に考案されたが、タワー
のためばかりでなく、メロディー
やハーモニーをつけられる位ベル
の数を増しテクニックを改良し
た。一九二三年にはボストンで、
ハンドベルのグループが出来、一
九五四年にはアメリカの連盟、一
九六七年にはイギリスで、又、日
本では一九七六年に世界第三番目
の連盟が誕生した。

ベルの表面はデリケートな肌
もつていて、指紋がつき易く、そ
こからさびになるので、必ず木綿
の手袋をつけ慎重にとり扱わなけ
ればならない。又振り方はベルの
大小の差はあれ、トレモロ、ビブ
ラート、スウイング等いろいろ工
夫をすることが出来る。

メンバーは十人位が適當で、一
人で二個から五個位のベルを受け
持ち、曲の速さと、リズムにより、
持ち替えながら音を続ける。

最後に私のささやかな感想とし
て、ハンドベルの練習によつて、
共に労し、責任、協力、忍耐と優
しさを学び、人ととのふれあい
を知るならば、このユニークな楽
器を演奏する本当の価値があると
思つてゐる。

きよき鐘の音は、遠く流れ
て、み子はやすらかに、眠りたまえり
(冒頭の二節)

月明りの下

竹中

郁（詩人・絵も）



むかし、大正の初期のころ、生田神社と湊川神社の境内に大砲がおいてあつた。乾いた梅ぼし色のベンキ塗りの図体は相当大きかつた。

いま、元町六丁目の三越の西の路面に蒸気機関車がおいてある。あれくらいの大きさは十分にあつた。なぜ平和で清浄であるべき神社の境内に、日露戦争で使いふるした大砲みたいなものを置いたのか。たぶん、当時、水ぶくれにふくれつづつた日本の軍国主義の現象の一つとして、神社側も民衆側もそれをいぶかつたり憤つたりしなかつたのだ。

な庭のような風情。両輪の高さも一米くらいの小りりしい砲車に砲身がのせてあつた。砲身の長さは二米あるかなし。さきの神社のとくらべると大人と子供どころではなかつた。

町角のかざりに置くにふさわしい姿かたちをしていた。いつたい誰の仕業か。たぶん、その建物に入っていたイギリス商館の主の思いつきからにちがいない。

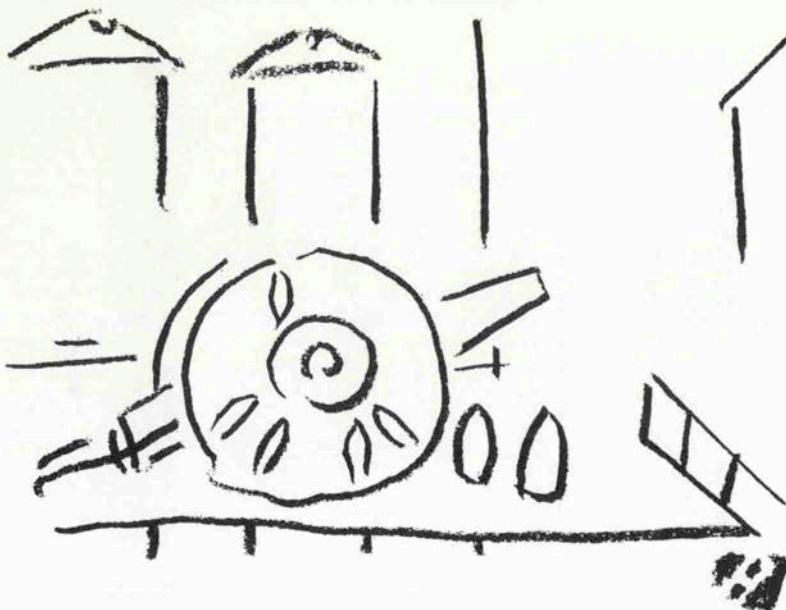
そのイギリス人は日本軍国主義が足音あらく世界をさわがせるのをたしなめたく、皮肉とユーモアとの入りまじつた玩具のような大砲を町角にかざることで表現したのではないかしら。

さて、同じ時期に神戸の元居留地の江戸町の四つ角に大砲がおいてあつた。今の高砂商行の北にあたる小さな空地に、周りを垣根でかこんで小さたのだ。

この小さな大砲はいつみても掃除がゆきとどいていて小気味のよい姿であつた。それに引きかえ、二つの神社の方のは保存がほつたらかしで、その

形が白のような重くるしい上に、熱意のない保管で見苦しい不ざまぶりであった。

大砲というような造形物をオブジェとして町中の人間生活の中に引き入れるのはおもしろいことだ。すでに武器としてではないものにふさわしい霧囲気をかもし出す点に新しい価値がある。



元居留地を月夜にあるくと、その静かさと寂しさとで一段と詩情を感じたものだ。そこへこの小さな古風な大砲。まるでナポleon時代のヨーロッパの戦争の絵巻物の一部が加わるので、神戸の元居留地の中とは思えなくなる不思議な影を感じた。

現在、市役所のぐりや大倉山のふもとに彫刻に依る環境造りが行われ、おのののテマに沿って作品が配されてゆきつつある。ひるまの光りにだけ浮び上らせるような方法だけではなく、月夜の効果も計算した作品群の一区画もあつてよいように思える。

ポンペイやローマの古跡を月明りの下で歩いたことはないが、大正時代にこの居留地の小さな大砲をみた記憶は今でも至つてあざやかだ。

一人のイギリス商人が思いついた行為が何十年後になつて私のあたまにはつきりとした映像をのこしていく、その砲車の姿をスケッチ帖に再現できる。

今日、その江戸町の角はただ路面の一部になつてしまつてゐるが、私はそこを通るたびに「まぼろしの砲車」を目にうかべる。

まさか、そのイギリス人、これほどまでに一人の日本人のこころ深くにまでもぐりこむ砲車とは思わなかつただろう。形や色彩が美しいというだけで、これだけ話に格差が生れてくれる。見ぐるしいものと小凜々しいものとの違いの行くすえを書きました。

連載エッセイ

折々の神戸(Ⅷ)

仔犬のいる 風景

多田 智満子
絵/石阪 春生



ひと月ほど前から、ひまさえあればデパートの犬売場やペットショップをのぞいてあるいている様子だったが、とうとう数日前、犬屋で柴犬の仔を買ってきた。

生きものは死ぬからかわいそう、といつて飼おうとしない人があるけれども、本当の犬好き猫好きになると、死んでも死んでも性りもなく飼いたがるものらしい。今年の六月頃の日本経済新聞の文芸欄で、歌人の佐々木幸綱氏が中年女性の投稿について書いておられる中で、こんな短歌が引用されていた。

愛し来し猫のため泣きつつわが庭に

百五十六番目の墓を掘りたり

この夏、飼犬のゴローがフィラリアで死んだ。私の家のように庭が草ぼうぼうとして「草深い」住居だと、どうしても蚊が多く、庭で飼っている犬は蚊にされ放題、したがって、蚊の媒介する寄生虫フィラリアは、ほとんど必然の運命のように犬の体内に巣くことになる。

体力があるうちは時々咳をするくらいで病気とも見えないが、夏の暑さで食欲減退し、弱ったところに風邪をひいたのがひきがねとなって、どうと病状が悪化した。最後の一週間は牛乳すら飲めなくなり、からうじて水だけ飲む、という状態で、栄養注射で力をつけようとしたが、所詮回復の見込みはなかつた。

かわいそうなことをした、と、空っぽの犬小屋を見ては家中さびしがつっていた。なかでも夫は、

いうような意味のことを佐々木氏は述べておられた。

たしかに百五十六番目の墓とはおそろしい数字である。庭じゅう猫の墓だらけ。にゃんとも気味のわいな話だが、しかしこの女性にしてみれば、いとおしんだ猫を火葬場に送るにしのびず、自分の庭にほうむってやりたいのであろう。

百五十六匹もの猫をかわいがって育て、それだけの数の猫の死を見送った女性。彼女は泣きながら庭を掘って猫の屍骸を埋め、そしてまた性こりもなく別の猫を飼いつづけるのだろう。

犬や猫は寿命が短いから、その一生は私たちのずっとあとからはじまつても、ずっと先に終る。夏に死んだゴローは、うちの娘が小学三年生のとき、よちよち歩きの仔犬だった。そして娘が高校に入った今年、八歳にならぬうちにやばやと死んだのである。人間ならば五十歳余りというところだろうか。犬の時間は迅速で、人間の持ち時間を足早に追いこして先に行ってしまう。いたいけな仔犬をふところに入れてかわいがるのも、立派に四肢の伸びた成犬を連れて裏山を散歩するのも、またあわれなその死をみとるのも、みな人間の生涯のなかの、心に残る折々の風景にちがいない。いくつかの犬の死を見送って、やがて自分自身の死を迎えるのだ。

ところで、私はこのところひどく忙しくて、しばらく犬は飼うまいと思っていた。どうせ飼うなら小さいうちから育てたいし、幼犬は何かと世話を焼けるものだから、とても時間がない、と思つていた。そこへ、夫が柴犬の仔をうれしそうにかかえて——といいたいがじつは仔犬を入れたダンボー

ル箱を車の助手席に積んで帰ってきたのである。かわいいだろう、と見せられて、うん、かわいい、と同意したのが運のつきだった。それでも、牝だというので私はかなり抵抗した。

——雑種の仔なんか生んだら困るじゃないの。——大丈夫、犬屋がいい牡を紹介して貸してくれるそうだ。

——それにしても生れた仔をみんな育てるわけにいかないでしょ。

——大丈夫犬屋がちゃんとひきとるつて。

——生ませてひきとらせるくらいなら、はじめから牡を飼う方が面倒がないのに。

——だつて、仔が生れたらおもしろいじゃないか。小さいのが庭でころころしてさ。

——それじゃあなた世話しなさいよ。ずいぶん手間がかかるんだから。
——そりや、できるだけはするさ。でも屋間はないからね。やっぱりあなたにやつてもらわないと。

要するにこれが敵の本音なのだ。一たんうちに入れてしまえば、もう思う壺、ブツブツいいながらでも私が世話を焼くことになるのを見通して、自分は「仔犬のいる風景」をのんびり楽しもうという魂胆である。一頭の牡犬だけならば、一年もすれば大人になってそれっきりだが、牝ならば次々仔を生む。愛くるしい仔犬たちが庭でふざけまわる情景を予想して彼は悦に入っているが、私は次々生まれる仔が迅速な生涯を了えて、「百五十六番目の墓を掘りたり」というようなことにならないようになると、今から対策に頭を悩ましてい

トランペッタ片手にブラジル一人歩き(7)

— 40 —

緑色の顔をした“息子”

パ・パガイオの話

右近

雅夫

〔在ブラジル・サンパウロ/絵も〕



トリニダード・トバゴからの帰途、アマゾン河のベレンで一週間ほど過ごし、まだ夜の明け切らぬベレン空港を国内線の双発機でサンパウロへ向けて出発した。離陸してしばらくすると天候がだんだん悪くなり、暴風雨になつた。機体が激しく揺れ出し、いよいよ危いと思った時には、当時のプロペラ機ではもうベレンまで引き返すことも

嵐の雲の上に出ることもできなかつた。元戦闘機のパイロットだったという機長は、乗客に安全ベルトの着用を命じ、いつでも不時着できる体制で嵐の中を強行突破した。高度をうんと下げ、アマゾン河の支流の上ばかりを縫うようにして、恐らく水面から十メートル位の低空で飛んだのだと思う。窓から外を見ると、まるでバスで走っているように、突風に揺さぶられる川岸の椰子の木や土人の小屋などが、すいすいと機体の窓すれすれに走り過ぎて行くので、生きた心地がしなかつた。

やつとゴヤス高原のポルト・ナショナルの飛行場に着陸した時には、風雨も割合おさまり、乗客一同胸を撫でおろした。そこは飛行場といつても、滑走路の脇に椰子の葉で葺いた小屋が一つあるだ

けで、土人の子供達が飛行機のすぐそばまでやって来て「おうむ」を売っていた。小さなのを「ピリキット」、大きいのを「アラアラ」というが、アラアラは海賊映画に良く出てくる赤や青の顔をしたでつかい奴で、嘴の大きさを見ただけでもうす氣味が悪いので、僕は中位の「パパガイオ」を当時の百クルゼイロを支払って買った。

パパガイオは別名「ローロ」ともいうが、体全體が緑色をしていて、目の周囲が黄色く、羽のつけ根が少し赤いブラジル特産のおうむで、巧く教え込めば何でも喋るようになる。燃料の補給が終ると飛行機は再びサンパウロへ向けて飛び立つたが、大嵐は過ぎたものの、気流の状態は相変らず悪く、途中で何度もエアー・ポケットに落ち込んだ。そのたびに僕の腕にとまらせていたパパガイオは、羽をばたばたさせながら床の上に放り出された。

サンパウロの家に帰つてきてからも、パパガイオはまるで二日酔いのようにあくびばかりし続け元気に餌を食べだすようになるまで二、三日もかかった。僕は早速古いほうきの柄で作つたとまり

木の上にパパガイオをとまらせ、「おはよう、おはよう」と繰り返していっていると、やつと頗狂な声を発して「ボン・ディア」といえるようになつた。それからといふのは、次から次へといろんな言葉を憶え、餌をやると必ず「有難度う」というし、当時流行していた「マラカンガーリヤ・エウ・ボウ」というサンバの一節まで歌うようになり、母や妹たちを驚かせた。

ところで、あの当時は二人の妹たちもまだ嫁に行つていなかつたので、母の料理の手伝いができるのをいいことに、僕は誕生日にはデキン

の仲間やブラジル人のアミゴを招いては盛大にフェスタをやつた。その日はちょうどジャズの好きな資本家のクラウデ・ブルム氏が僕の仕事に出資してやろうというので、一緒に招き、皆と食事をしていた最中であつた。急に誰かがけらけら笑いだしたかと思うと、ブルム氏が「あづちへ行け！」

と怒鳴り出したので、何事が起つたのかと彼の方を見ると、裏庭のとまり木にいた筈のパパガイオがブルム氏の肩の上にとまつてゐた。台所から食堂に入つてきて、椅子をよじ登つて食事中のブルム氏の肩の上にとまつたのであろう。パパガイオは首を一ぱい伸して横合いからブルム氏のご馳走を失敬しようとしているところであつた。ユダヤ人特有のブルム氏のわし鼻が、パパガイオの鉤型をした嘴そつくりで、その光景を見て皆笑いこけてしまつた。

パパガイオはなかなか悪賢い鳥で、ちょっと油断していると、とまり木からおりて、勝手に裏庭から台所や居間にまで入つてきて家具の足をかじつたりするようになつたので、父が怒つて針金でできた鳥籠を買ってきて、その中へ閉じ込めてしまつた。一時あんなに何でも喋つて人を驚かせた我が家のパパガイオは、その時以来毎日ぎやあすか鳴くばかりで、人間の言葉は余り喋らなくなつてしまつた。

それから十数年経つて、僕はブラジル人の女性と結婚したのだが、まだ婚約当時、彼女を家に連れて行き、「実は僕には緑色の顔をした息子が一人いるんだが、僕等が結婚したら母の家にあづけて置こうかな……」と冗談のつもりでいつたら、彼女はびっくりしてしまつた。半信半疑の彼女を裏庭に連れて行き、久し振りに鳥籠からパパガイオを出してやると喜んで、「パパイお元氣？ パパイお元氣？」と喋り出した。「なるほど、彼が緑色の顔をした息子さんだったのね」というなり彼女はてれくさそうに笑つたが、内心黄色い顔をした息子でなくてほつとしたことであろう。



★★★ 犬飾りが華やかなショート
★ X'mas Party で踊りあかそう ★



デザイン/畠尾宇多子

〈本店〉ベル・ジュバンスの専門店
神戸・三宮神社北東三上ビル3F TEL.331-8894・4917

〈芦屋支店〉
芦屋・阪神 芦屋 駅山側 TEL.0797-22-4067

お貸衣裳部 東京初代遠藤波津子直流
花嫁衣裳サロン 畠尾美久子の店
本店美容室エリザベスの上 TEL 331-3258
専属結婚式場 生田神社会館/プラン・ドゥ・プラン/阪急六甲ホテル/蘇州園/海皇/北野クラブ他

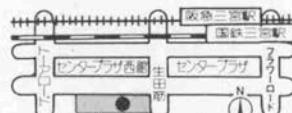
株式会社 美容室 エリザベス

ファッションに
“贅”を尽くすのは素敵。
でも、
いつも美しく着ている
人はもっと素敵。



技術に贅を尽くしファッションを
常に美しく ——ニシジマ

- 型くずれの防止
- 素材感の回復
- カルテの作成
- お客様のお好みに合せた仕上
- ファッションクリーニング
- ニシジマの最新情報の提供



神戸市中央区三宮町2丁目10番7号
グレイス神戸B1 (078) 332-2440

ポートピア等が語る

小林信次郎

(大阪工大教授、英語・アフリカ文学)

神戸はハイカラであり、ナウイだ。新しい文化をどしどし取り入れて、それを栄養素にかえてしまふが、ときには傭しやくを怠つて下痢を起すこともある。今年の神戸の最大のトピックは神戸博であり、それに附隨してポートアイ、ポートライナー、ポートピア等の神戸製の英語のような言葉が生れたが、これらはいかにも神戸的だ。

ポートアイとは人工の港の島を表すポートアイランドのトランドとを省略して生れた新語であろう。日本語の拍、換言すれば音節の数は三拍から六拍が約95%でその中でも三拍と四拍とが一番多



1,600万人の入場者を集め、『ポートピア』の名は全国に広まった

ポートライナーも神戸的センスに溢れている。ライナーとは英語で定期船や航空機を意味するから英米人にポートライナーと言えば港巡りの遊覧船を連想されてしまつた。神戸大橋からポートアイに延びる高架の線路はさながら野球のライナーであり、低速で走る車窓の眺めは遊覧船のそれであり、自動運転の新しい列車であるから、あえてポートライナーと命名されたのであると説明すると、実状

が来る。ところが博覧会協会はポートピアと大書してP-Rに余念がなかった。ゴダイゴも中部の文字も後部の文字も同時に省略する外来語の造語法は珍らしい。これほど短時に普及した例は稀有かもしれない。これは一つにはポートアイの拍も響きも良いからである。二つには神戸つ子のことばに対するセンスの鋭さと、新しいものに物おじしない気質があるからであろう。

ポートライナーも神戸的センスのポートピアと書くと日本語の平均的音節の数から一層遠くなるうえに、音の響きも日本語になじみにくい。ポートピアの方が音節の数も響きも良い。神戸つ子は内容(意味)からかけ離れても響き(体裁)の良い日本語になじむ外來語標記を選択したことになる。ポートアイ、ポートライナー、ポートピアの三語はハイカラだともいわれる神戸の精神風土、換言すれば文化の一端を如実に示していると言えよう。

ポートピアは英語の *port* と *utopia* の合成語であるから、*Portopia* と綴りポートウピアと書き、読むときはウにアクセントが来る。ところが博覧会協会はスターにポートピアと大書してP-Rに余念がなかった。ゴダイゴも博覧会賛歌でポートピアとトを長音で歌つたのはさすがに外大出身だと思わせたが、ピアを高く歌つていた。英語でピアとは桟橋とか突堤の意味でポートピアと言つても大同小異である。事実神戸港の突堤は英語でピアと表示されており、京橋から博覧会に行く外国人はピア3という表示を見てまごついたそうである。とは言うもののポートウピアと書くと日本語のポーテトウピアと書くと日本語の平均的音節の数から一層遠くなるうえに、音の響きも日本語になじみにくい。ポートピアの方が音節の数も響きも良い。神戸つ子は内容(意味)からかけ離れても響き(体裁)の良い日本語になじむ外來語標記を選択したことになる。

・対談 『世界の染付』全6巻刊行に寄せて

海のシルクロード 陶磁の世界

三杉 隆敏

〈小原流美術参考館
副館長〉

VS 奈良本 辰也

〈歴史家〉

界の陶磁器文化ということでお話をお願ひいたします。

三杉 近頃は大変なシルクロード・ブームですね。しかし、絹が中国の特産品であったことはみなさん知つてお

られるのですが、千三百度の高温で磁土を焼いた磁器も中国の特産品で世界中の人たちがそれを手にしようと狂奔したことは忘れられている。それと重い焼き物をラクダの背でたくさん運べるわけがない。だから今一つの東西交易ルートである海をたどって船で運んだと推定し、その海上ルートを自分でたどつたのが『海のシルクロード』なのです。

奈良本 海のシルクロードという発想は面白いですね。何も陸路ばかりを通らなくても、海の方が、言ってみれば、もっと楽に来れるのだから、当然、海のシルクロードはあっていいですね。

陶芸家の加藤唐九郎から話を聞いたのだけど、陶器はペルシアが一番だと言うんですよ。つまり、シルクロードを通つて西へ行くほどよくなるんだと。ペルシアはい

三杉 隆敏さん

——このほど京都の同朋舎から『世界の染付』(全6巻)が刊行されることになりました。著者の三杉先生は、『海のシルクロード』の提唱者でもあり、昭和四十三年に『海のシルクロードを求めて』を出版されています。そこで今日は、歴史学者の奈良本先生と三杉先生とで、世



いよ、やっぱし、と言つてゐるんですよ。ペルシアからずっとシルクロードを通つて來たのが、これまで一番才ソドックスな道ですけれど。しかし、ペルシアから何もの砂漠の道を通つて來なくたって、海からだつて來られるわけですね。

三杉 そうですね。だけど問題になるのは、ペルシアの土は八百度を越すと窯の中で崩れるんですよ。だから正倉院のいろいろなものだつて、発想は西にあっても中國まで來て工芸が完成され、それが伝わつてゐる。しかしペルシアの影響は磁州窯とかぐらいで、染付は南へ回つて中国へ來たのじやないかと、私は思つてゐるのですが。

奈良本 ペルシアに一応の源流を求めてみると面白いと思つたね。それより西にはないでしよう。

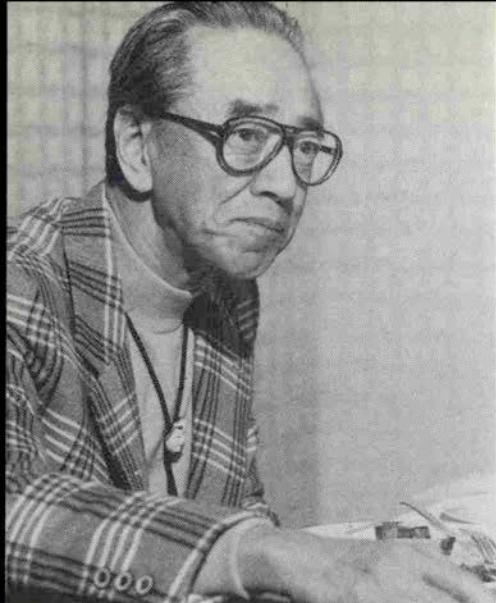
三杉 ないですね。ヨーロッパの陶器は明らかにペルシア系ですね。しかし、昔はヨーロッパの人は自分たちの焼き物がペルシア系だとは言わなかつたですね。

奈良本 とくにスペインでそれを感じましたね。

三杉 そうです。ペルシアの陶器がエジプトまで行つてエジプトからイベリア半島を越えてイタリアへ入つて行き、さらに北の方へ上つて行つたようですね。

奈良本 ニューヨークにスペインの物を集めた素晴らしい

奈良本 段也さん



博物館があるんですよ。いいものがありますよ。それを見たときにつくづくこれはペルシアから來たな、と思いましたね。ペルシアの色調があるんですね。

三杉 ヨーロッパの延長ともいえるメキシコへ行きまと、例えはエブラの教会なんかでも、真つ青なドームがついていて、キリスト教の教会なのに、メキシコの乾いた風土の中で見つてみると、イランのモスクと一緒に感じた。非常に変な気がしますね。

今度の私の「世界の染付」は全六巻の構成で、第一巻が元、第二巻が明初期、第三巻が明後期・清、第四巻が伊万里・李朝・安南、第五巻が西アジア・ヨーロッパ、第六巻が陶器と、ずっと染付を網羅して行くわけです。

いかにして染付が世界中に広がつて行つたかを追つかけ

るのですが、もちろんメキシコまで入れました。

奈良本 染付つてのは、かなり温度が高くないといけないのでしょう。コバルト（土青）がちゃんととした色を出すには。

三杉 いえ、そんなことはありません。唐三彩でも八百度そこそこですね。反対に千三百度で焼いても耐えるわけですね、コバルトは。

奈良本 温度が高い方が味が出るのじやないですか。染付らしくなるのじやないですか。

三杉 ですから染付という言葉に非常に問題があつて、染付というは磁器の白地に青色の模様のある焼き物のことと、陶器の白と青色の模様は染付ではないかも知れない。

奈良本 そんな感じがしますね。唐三彩ではどうも染付の感じがしない。やはり、元まで降りて來ると、これは染付だという感じがしますね。途中の宋はどうなんですか。

三杉 宋から染付が作られ始めたことは近年確定して來ました。しかし試作的なもので色も悪い。だんだんと私が調べていて分つて來たのですが、元の染付はアラビア人がつくらせたんですね。

奈良本 ほう、そうですか。

三杉 中國では國家が亡びると焼き物に限らずすべての工芸は悪くなるのですが、にも関わらず宋が亡びても竜泉青磁だけがすごくいいものを作るのです。その頃景德鎮も技術が落ちている。近年の大発見である韓国新安沖発見の沈没船から大きな竜泉青磁がいっぱい出てきたのですが、どうも南海から中近東にかけ青磁がまずアラビア人によつて売られた。ところが、一応マーケットにいっぱいになつたので、新製品が必要となり、それが染付だつたと私は推定しています。トルコのトプカビの宮殿に三十六点、テヘランで三十六点、それからインドあたりでも元染付が六十数点出て来ている。インドネシアでもフィリピンでもそうですね。ですからアラビア人が少しさびれていたが大量生産のできる景德鎮に注文を出して、優秀な陶工を竜泉青磁からつれて来たり、いいコバルトを彼らがもつて来た。だから宋時代からぼつぼつ試作的なものをつくついたけれど、アラビア人の注文で本格的につくるようになったわけです。だから出来たものはアラビア船に乗せて南海からインド、西方に広げたということです。中国人自身はそのころ青磁とか白磁が好きで、染付はダメだと思っていたらしいですね。

奈良本 アラビア人が景德鎮につくらせたわけですね。三杉 外人が注文してつくらせたのですから外人が全部もつて帰るわけです。中近東の発掘では、カイロのフオスターなど元の染付の大きなグループが出て来るのですが、中国大陸ではそういうのがどこにもない。だから中国の焼き物では元染付だけでなく他にも中国になくて、外国にあるものが多いですね。それほど彼らは外からの注文に対して受け入れ体制があつたようですね。

奈良本 その頃から外国人が景德鎮に眼をつけていた。三杉 アラビア人のあとはオランダ人がそれに替わるのですが、あのへんの変化は非常に面白いですね。

奈良本 元の陶器の味に少しよそよそしさがあるのは、外国の注文でつくつたからなんでしょうかね。よそよそ

しさというか、急に変つて来ますね、宋から元へは。つまり、青磁・白磁の世界からガラッと変りますね。

三杉 それは中国人が商売として外注品をつくるのだけれど、そのときに中国人自身が本当に元の染付で、いいものができたと喜んだかというと、それは分りませんね。

奈良本 それは分らんですね。青磁・白磁の世界から染付へバツと移つたら、ちょっと異質のように思われますよ。しかし、色が鮮やかですね。とってもキレイだな。元の次は明ですね。明はどうなんですか。

三杉 明は磁器に年号を「大明宣徳年製」と宣徳以降入れるようになりますね。ただ、中国陶磁史の教本といえる「陶説」、あれは、清朝の乾隆時代に朱琰という人が記したのですが、この本ができたその頃の清朝で何が一番いいかと言うと、大清康熙年製とか、大清乾隆年製とかという銘が入つているのがいいという観念がありますから、そうすると古いところで大明宣徳年製という名前が入つていると、これが一番いいということになつたんですね。本当は宣徳より前の永楽の方がいいわけですよ。宣徳はほんの十年そこそこのことです。永楽の方が長いんです。永楽の方がいいものを焼いているんですね。その先には元があるわけでしょう。だが、中国の文献の上では、大明宣徳年製がいいと記してある。もちろん宣徳が一番いいんだといった清の乾隆の時点では品物が残つていたわけです。それは、清朝の人たちが自分たちの時代で銘が入つているものがいいものだという観念で昔をみてしまつた。年号が入つているものがいいとなると宣徳が一番いいとなる。その前の永楽も元もどんどんしまつたという気がしますな。

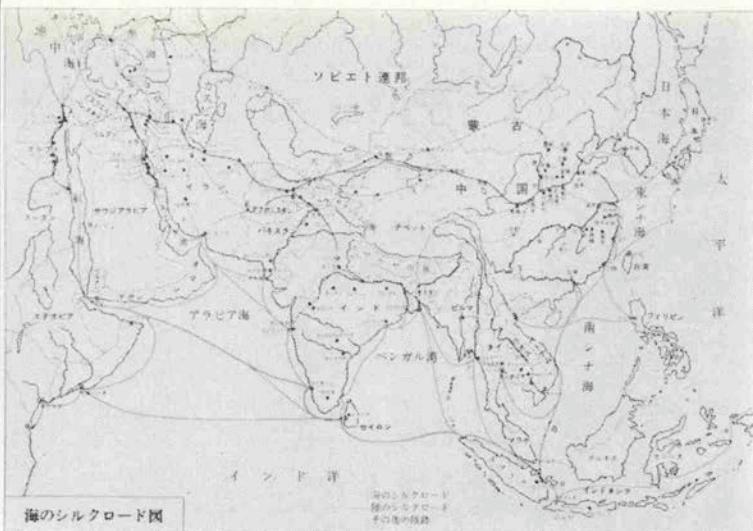
染付の古典は元にある

奈良本 ところで染付に惚れ込まれたのは、どういうきっかけからなんですか。

三杉 私自身、自分で絵を画いていたものですから。焼



染付牡丹唐草文大皿 ベルシア 16世紀前期



き物にも絵が施されていることは楽しいですね。そうすると染付が面白くなる。それと全体の形を写真に入れたりしていると鑑賞者の眼で見ていくわけですが、ディテールを大きくすると景徳鎮で絵を書いていた職人と隣合わせに並んで対話しているような気がして、そういう楽しさもありますね。

奈良本 染付というものは、われわれの世界で日常化していく、一番近いですね。家へ帰ると、わが台所で出て来るのがそれですよ。私は今頃の皿や鉢じやなくてちょっと古いのを使うのです。江戸時代ぐらいのを日常のものとしてですね。全部が染付なんです。なるほど染付はオレたちの生活に密着しているのだな、という気がしますね。僕はまず女房を教育しようと思つてね(笑)、皿とか鉢とかを買って来て使わせるんですよ。そうすると今様のものを全部駆逐して行くんですね。いつの間にかわが食卓の上は江戸時代の陶器とか磁器とかで占領されてしまうんです。伊万里が多い、何といっても伊万里が多いですね。次には九谷ですね。その次が瀬戸ぐらいだけ。しかし、僕らがひょっとと買って日常使うのには伊万里と九谷が多いですよ。

三杉 わが家でもそうですね。焼締(やきつづき)（高火度で焼いた無釉の焼き物）ですね、備前焼とかもいいと思うのですが女房子供は、あれは洗いにくいとかテーブルに傷がつくとか言つてね。そうなると染付がよくなるんですよ。

奈良本 中国の染付となると清の物が一番多いですね。一番古くて明の呉須手の染付ぐらいでしようね。

三杉 この間、故宮博物院の陶磁器室の耿先生らが神戸に来られたときに、貿易品に関する文献がないかと聞いたのですが、まったくないと言いますね。だから今までの中国の焼き物の学問に出て来ない輸出品がわれわれの新しい研究のフィールドですね。

奈良本 清朝はあまり研究されてないですね。三杉 ヨーロッパやアメリカへ行くと、清朝のことをよく知っていますよ。

奈良本 そうですか。

三杉 これは焼き物のことだけではなくて、僕はよく言うんですが、日本は江戸三百年間、鎖国していたわけですよ。日本人は日本人の感覺で中国の儒教とかを上手に拾つたのですが、その間にヨーロッパではシノアズリー（中国趣味）の流行があつて、清朝を肌で知つていただけけれど、われわれはちょうど鎖国時代で清朝を知らないのじやないかな、という気がしますね。

奈良本 古い中国は知つても新しい中国には興味がなかつたのかも分りませんね。

三杉 僕はそういう気がしましてね。それとどんなにりっぱな中国の美術品をもつてゐるコレクターでも日本人のコレクターは、やはり結局日本人ですね。それがアメリカとかヨーロッパへ行くと、アメリカ人やヨーロッパ人なのに何かメンタリティーが中国人みたいな人がいますね。何か中国人と暮らしてゐるみたいですよ。家の中にもいっぱい中国のものを置いたりしててね。そういう意味での中国趣味は日本にはないみたいですね。

奈良本 昔はあつたんでしょう。江戸時代の学者なんて全部中国名をつけたりしてましたね。荻生徂徠とか頼山陽とかね。

三杉 そのへんをおたずねしたいのですが、それが清朝の中国を理解した日本人であったのか、どうか。

奈良本 要するに日本に合つた中国だけでしょう。それに何と言つても一番えらいのは、唐まででしよう、日本がえらいと思っているのは、明以後はつまらない、それほど大したことはないと思つてたのでしょうか。豊臣秀吉

みたいに兵を出すもいたぐらいですかね（笑）。本来なら恐れ多くて兵を出せる国ではなかつたですかね。三杉 そのへんに日本人が見ている中国というものは、あの長い歴史の中で日本人に合うところだけをつまみ喰いしたということでしょうね。

奈良本 あんな長い歴史の間にいろんなものをつくつたのに、日本には日本人に合うものしか入れなかつたわけ

です。もちろん日本人はすごい感覺をもつてゐますからいいものはあるのですが、日本から外へ出ると、日本では聞いたことも見たこともないものがいっぱいあつて、それもギトギトしてて、色がキレイでね、ああ、これはかなわんと思うのですが、それがいっぱいあるのでびっくりしますね。ところがヨーロッパ人の知つてゐる中国はこっちの方なんですね。

奈良本 僕は元の染付では好きなんだよね。何か力強いでしょう、非常に。それ以降、明の嘉靖とか萬曆の赤絵とかになるとちょっとついて行けないような気がしますね。

三杉 形式化されて来ますね。そういう意味では染付の古典は元なんだということじやないかと思います。

李朝と志野で日本人は死ねる

奈良本 明以降は小さいものにかえつていいものがありますね。小さい皿とか印肉入れとか、ちょっとした水滴とか、こういうものにはわりと親しみがあるんですよ。

三杉 そういうものは元にはないですね。やや薄手の小さなものならあることはあるのですが、上海の博物館にもありますね。面白いのは蒙古のカラコトの発掘品の中に薄いものがありました。

海のシルクロードの話に戻ると、やはりぶ厚くて大きいものを船で運んでいたわけですね。清朝のもので大きいのが中国やヨーロッパにはあるんですよ。それはわれわれから見たらいかに醜いものであるか。

奈良本 感覚が違うんですね。

三杉 日本人の感覺では小さいものの方がいいんですね。

奈良本 なかなかシャレたものがありますよ。

日本の染付は、韓国から來た陶工の李參平が有田ではじめてつくつたと言われていますね。

三杉 ただ、これはちゃんとした文献の裏づけが要る

思うのですが、九州の有田の磁器が全部韓国系であるとは言えないと思うのです。李參平だけじゃなくて、言う

なれば揚子江の入口のあたり、浙江省なんかの陶工もやつて来ていた。韓国からも中国からも磁器の技術が入つて来ているときに明が亡んで清朝になった。そうすると東印度会社が、中国が社会混乱で生産がダメになったから、それのピンチヒッターとして有田に注文をするわけですね。そのちょっと手前に李參平たちがぼちぼちとつくりかけていた。日本の染付はそれ以降のことです。

メキシコで地下鉄の工事をしていたら伊万里の破片が出て來た。それは芙蓉手なんですが、中国の芙蓉手が切れてしまつたので、日本の伊万里がピンチヒッターで出て來るわけですね。大きな眼で歴史を見てみると、伊万里はあとの方だな、と思うわけですよ。

奈良本 伊万里が盛んになるのはいつ頃ですか。

三杉 李參平が來た直後に東印度会社が大量に注文をするところですね。

奈良本 安南はどうなんですか。

三杉 安南は中国文化圏の傘の下ですね。安南、李朝、伊万里を中国の傘の下の一つと見るのがいいのじやないかと思いますね。

実は今年、インドネシアのジャワ島北東部のトバン沖で沈没した元の船の積み荷の中から安南染付が出て來たんです。うんと初期のものですが。

奈良本 僕も一つもついているのだけど、トカゲのようないものがついていて実際にグロテスクなんだね(笑)。その上に呉須がずっとかかっているんです。その呉須を見てみると、あまりいいものじやなくボケたような感じですね。

三杉 でも日本人はあんまり真っ白や真っ青じやなくて、ボケている方がいいようですね。

奈良本 李朝にちよつと似ていますね。

三杉 そういう意味では、日本人はきちっとしているよりは少しほけている方がいい。李朝がいいんですよ。李

朝と志野(焼)で日本人は死ねる、と言うんですよ。

今度のシリーズの李朝篇にも書いたのですが、日本人というのは、ちょっとくすれたものがいい。元の染付とかになると向こうがちゃんとしているので、こっちの方も威儀を正して羽織袴。だけど李朝はボケているから、こっちもリラックスして浴衣掛けで、やあこんにちわ、という感じですね。

韓国の人たちが日常雑器として使っていた飯茶碗を日本人が茶器として大変な価値を与えた。それと向こうの人たちは雑器だと思ってる李朝の染付を日本人が非常に高く評価した。だから日本人は二度、韓国人とは全然違う観点で韓国の焼き物を楽しんだという話があるんです。韓国人たちは高麗青磁がいい、ヨーロッパの人たちも高麗青磁や白磁がいいと言つてますね。そういう意味で日本人の感覺は面白いし、決して悪いとは思いませんけれど、日本人がいいと思ってるものと向こうの人があつた大事にしているものとにはズレがありますね。世界の染付を研究していますと、そういうズレが浮き上つて来て面白いですね。

奈良本 一種の世界文化史になつちやうわけだね。

三杉 いわゆる歴史という眼で焼き物を見るのが面白いか、キレイなものだということで見るのが面白いか、どちらが面白いのかなと思つてみたりするのですが。

奈良本 そりや歴史という眼で見たらダメです(笑)。

好きか嫌いかで見る。そこからですよ、出発は。歴史学的にどうだというのでは本当にものは分らないですよ。そうじやなくて好きか嫌いかを己れの心に問うてみるところから歴史は始まるんですから。よかつたらなぜいいのだろう、嫌いだらなぜ嫌いなんだろう、を追求して行く。なぜボケている方がいいのだろう、と。そこから出発ですよ。決して何か歴史があつて、その次に陶器があり、あるいは、言ってみれば模様があるというのじゃないですね。